



Next is us

日体魂を受け継ぐ者

2020年に向けて、
日体大から世界のすべての人々へ
スポーツの魅力と平和への願いをつないでいく。

Special Contents

03 川淵三郎氏に日本体育大学名誉博士称号を授与

日本スポーツ界の新しい時代を切り開いてきたリーダー・改革者
日本体育大学 歴代名誉博士称号授与者一覧

05 大学院・保健医療学研究科に博士課程を開設 (2020年4月)

運動器柔道整復学専攻／救急災害医療学専攻

07 UNIVASと日体大の取り組み

大学スポーツが変わる。
次代を担う学生アスリートを支援する。

日体大スポーツ指導者研修会を実施

09 建学の精神を具現化し、 スポーツ・健康をリードする研究活動

(日本体育大学における研究活動の基本方針【活動方針】)

VOL.2 オリンピックスポーツ文化研究所 スポーツの理想を次代に繋ぐ

多角的・総合的な研究によりオリンピックの理想を追求する
オリンピックスポーツ文化研究所 関根 正美 所長・体育学部体育学科 教授

13 スポーツ救急をひもとく

⑥総集編 もしもに備えて

小川 理郎 保健医療学部 救急医療学科長 教授

鈴木 健介 保健医療学部 救急医療学科 准教授

中澤 真弓 保健医療学部 救急医療学科 准教授

17 Next is us 日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

第11回 リングの上で主人公になり、
世界を目指して攻め続ける

入江 聖奈 選手 ボクシング女子

19 news & topics

横浜・健志台キャンパス学友会運動部所属学生に啓発講話を実施
アフガニスタン・イスラム共和国大統領が本学に來校いたしました

セーリング競技 49erFX級(女子) 山崎アンナ(ノエビア・日本体育大学)が
東京五輪2020日本代表選手内定！



新しい時代

▷今、このとき、この時代を生きている偶然を皆さんはどのように考えているだろうか？ 昨年、令和の世に代わり、今年2020年は東京オリンピック・パラリンピックが開催される。このような時代の大きな節目に立ち会う重みを感じ、心にとくと刻んでおく責任がある。
▷そして、傍観するだけでなく、時代の変化に主体的に関わっていききたい。今号では「保健医療学研究科の博士課程開設」、「UNIVAS（一般社団法人大学スポーツ協会）と日体大の取り組み」などの話題を紹介した。いずれも時代と社会の変化やニーズに対応した展開だ。学び、自己研鑽する機会は確実に広がっている。

▷オリンピックムーブメントとは近代オリンピックの精神の実現までを含めた活動を指すという。今年を節目に、以降の世界にスポーツを通じて平和と幸福を築いていかなければならない。この時代をどう生きたか。後世に自信を持って語れるように、努めていく使命がある。



学報

学報 NITTAIDAI 59号 2020. WINTER

NITTAIDAI

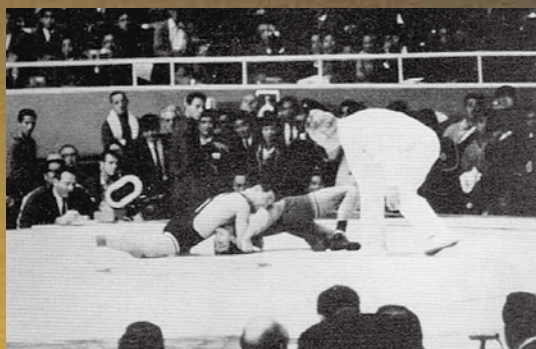


日体大とレスリング

東京大会（1964年）以来、レスリングは、日体大関係者のオリンピックでのメダル獲得・入賞が途切れていない。日本のお家芸の一つとされるレスリングの隆盛を日体大が支えてきた。

花原勉（名誉教授）が、前回の東京大会で金メダル（グレコローマンフライ級）を獲得し、日体大レスリングのオリンピックの歴史が始まった。次のメキシコシティ大会（1968年）では、藤本英男（名誉教授）が銀メダル（グレコローマンフェザー級）で続いた。以後半世紀にわたるオリンピック各大会で、メダリストだけでも、高田裕司、長島偉之、佐藤満、太田拓弥、永田克彦、田南部力、松永共広、湯元健一、松本隆太郎、樋口黎、太田忍の各氏が名を連ねる。

日体大レスリング部は約70年の歴史を誇り、オリンピックはもとより世界選手権等でも輝かしい成績を残してきた。その強さの理由の一つは絆の強さだろう。伝統を確実に受け継ぎ、名門に憧れ、強豪選手が多く集まる。



金メダルに輝く花原勉の押さえ込み（1964年東京五輪）

現在も部長・松本慎吾、専任コーチ・湯元健一、松本隆太郎のOBオリンピック経験者が指導にあたっている。こうした母校やレスリング部に対する愛着があればこそ、強さや部の精神が継承されていくのであろう。

遡れば、メダリストの藤本や高田からも花原の指導を受けてきた。後に花原は後輩に次の言葉を送っている。（※）

「確固たる目的意識を持って食と取り組む。ここには味覚と嗅覚が関係する」「確固たる目的意識を持って技を盗む。ここには視覚が関係する」「確固たる目的意識を持って教えを請う。ここには聴覚が関係する」「確固たる目的意識を持って練習を行う。ここには触覚が関係する」

体験と研究に基づき、レスリングを通して人としてのあり方も説いた。

レスリング部の恒例行事「成人マラソン」は、渋谷で清掃活動を行った後、横浜・健志台キャンパスまでの25キロを走るという。部のブログの写真は人柄を象徴する笑顔に溢れている。

※オリンピックスポーツ文化研究2018.3メダリストの軌跡 依田充代・清宮孝文より



東日本学生レスリングリーグ戦で27度目の優勝を果たす（2019年5月）

川淵 三郎 先生 日本体育大学名誉博士称号授与式



令和元年12月19日、東京・世田谷キャンパス記念講堂において、日本体育大学名誉博士称号授与式が挙行政され、川淵三郎氏に同称号が授与されました。川淵氏はJリーグの設立、日本サッカーの発展に寄与されたことをはじめ、卓越した手腕とリーダーシップで日本スポーツ界の新しい時代を切り開いてきた功労者です。当日は授与式とあわせて、「夢があるから強くなる」と題して、学生・教職員に対して講演していただきました。



川淵三郎氏に 日本体育大学 名誉博士称号を授与

日本スポーツ界の
新しい時代を切り開いてきたリーダー・改革者

授与理由

川淵三郎氏は、大阪府立三国丘高等学校でサッカーを始め、早稲田大学、古河電工サッカー部でプレーされ、1958年、国際親善試合の香港戦で日本代表デビュー。1964年の東京オリンピックでは、アルゼンチンを相手に1アシスト1ゴールを決めるなど、チームの逆転勝利とベスト8進出に貢献されました。

現役引退後は古河電工監督を経て、1980年から1981年日本代表監督に就任、その後、日本サッカーリーグ総務理事、日本サッカー協会理事を歴任され、日本サッカーのプロ化を牽引し、1991年にJリーグ初代チエスマンに就任されました。

Jリーグの設立において同氏の果たした役割は極めて大きく、その後のJリーグ、日本サッカーの発展においても、同氏は、高い経営手腕と卓越したリーダーシップを発揮されました。あわせて、同氏は、2002年FIFAワールドカップの日本招致と開催成功に尽力し、アジアサッカー連盟(AFC)プロリーグ改革などにその手腕を発揮されるなど、国際的にも活躍されました。

Jリーグの設立とその後発展は、地域に根ざしたクラブがその地域のスポーツ振興に寄与するという地域密着型のクラブ経営の可能性を示し、我が国のプロスポーツの在り方に大きな影響を与えました。あわせて、Jリーグが

掲げる、「あらゆるスポーツを行うだけでなく、スポーツを観る、語る、応援するといった、生活の場に根付いたスポーツとかかわりを推進すること、豊かなスポーツ文化の醸成を目指す」いわゆる「百年構想」も我が国のスポーツの在り方に大きな影響を与えているところです。

また、同氏は、日本バスケットボール協会会長にも就任し、その経営的手腕を発揮され、プロバスケットボール・Bリーグの設立を主導されました。

同氏の高い経営手腕と卓越したリーダーシップやその見識への期待は大きく、東京都教育委員会委員や首都大学東京理事長を歴任され、現在は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会評議員、日本トップリーグ連携機構会長、大学スポーツ協会顧問などをつとめられておられます。

同氏が掲げたJリーグの理念は、我が国のスポーツ界の発展に大きく寄与しているところですが、あわせて、理念を高く示し、その実現に向けてリーダーシップを発揮する同氏の姿は、我が国のスポーツ界のみならず広く社会にも関心をもたれ、大きな影響を与えているところです。

同氏は、スポーツ界のリーダーとして、選手や競技力強化のみならず、スポーツを通して広く社会に貢献されました。その功績はまことに顕著であります。



かわぶち さぶろう
川淵 三郎氏 略歴

1991年11月～2002年7月	Jリーグチエスマン
1994年5月～2002年7月	日本サッカー協会副会長
2002年7月～2008年6月	日本サッカー協会会長(キャプテン)
2008年6月～2012年6月	日本サッカー協会名誉会長
2012年6月～2018年3月	日本サッカー協会最高顧問
2018年3月～現在	日本サッカー協会相談役
2015年5月～2016年6月	日本バスケットボール協会会長
2011年6月～2012年11月	東京都教育委員会委員
2013年4月～2017年3月	首都大学東京理事長
2014年3月～現在	東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会評議員議長
2016年6月～現在	日本バスケットボール協会エグゼクティブアドバイザー
2015年5月～現在	日本トップリーグ連携機構会長
2019年3月～現在	大学スポーツ協会顧問
<受章・受賞>	
2005年	AFCアワード・ダイヤモンドオブアジア賞
2006年	FIFA (国際サッカー連盟) 功労賞
2009年	旭日重光章
2015年	文化功労者
2016年	オリンピック・オーダー

日本体育大学 歴代名誉博士称号授与者一覧

本学では、日本体育大学名誉博士称号授与規程に基づき、
学術文化や国際交流、スポーツ振興などを通じて、
教育研究や国際平和への功績が顕著な人物に名誉博士の称号を授与しています。
これまで授与されたのは次の方々です。

名誉博士第1号 平成14年2月21日授与

サンジベグジン・トゥムルオチル氏 [モンゴル国国家大会議 議長]

トゥムルオチル氏は、モンゴル国と我が国のスポーツをはじめとする国際交流を促進することに貢献したことによる。

名誉博士第2号 平成15年2月22日授与

趙 永植氏 [慶熙大学 学園長]

趙氏は、本学の前身である日本体育専門学校で学び、その後、韓国に総合大学である慶熙大学を創設するとともに、平和研究を通して国連と連携した活動を行ったことによる。

名誉博士第3号 平成17年11月22日授与

坂口 美代子氏 [財団法人坂口国際育英奨学財団 理事長]

坂口氏は、本学の前身である日本体育専門学校で学び、その後、教育・研究界において多数の役職を歴任するとともに、財団法人坂口国際育英奨学財団を設立し、アジア諸国やその他の国から我が国の大学へ留学する者を支援したことによる。

名誉博士第4号 平成20年10月23日授与 [クウェート国皇太子]

シェイク・アハマド・アル・ファハド・アル・アハマド・アル・サバーハ氏

アジアのみならず、国際的な立場から学術・文化・教育・スポーツの発展に寄与され、かつ我が国と、クウェート国、アジア・オリンピック評議会との間の交流を促進した顕著な功績による。

名誉博士第5号 平成23年6月23日授与

猪谷 千春氏 [国際オリンピック委員会 元副会長]

長年にわたる国際オリンピック委員会の委員・理事及び副会長として、内外のオリンピック・ムーブメント推進に尽力し、スポーツを通じた国際社会の平和の実現に向けた顕著な功績による。

名誉博士第6号 平成23年12月5日授与

森 喜朗氏 [第85-86代 内閣総理大臣]

森氏は、1998年5月の「スポーツ振興投票の実施等に関する法律」、2005年6月の「食育基本法」、2011年6月の「スポーツ基本法」等の制定を実現させるとともに、日本体育協会・日本プロスポーツ協会・日本ラグビーフットボール協会等の会長として日本のスポーツの普及・発展に尽力し、さらに2011年7月に日本体育協会及びJOC創立100周年記念事業を実行委員長として成功に導き、「スポーツ宣言日本」を内外に発信してスポーツによる平和な国際社会の実現をアピールされた功績による。



名誉博士第7号 平成24年7月9日授与

ハミド・カルザイ氏

[アフガニスタン・イスラム共和国 大統領]

カルザイ氏は、五輪など国際大会に選手を派遣し、戦乱によって混乱し、不安定な国内情勢にあつて疲弊した国民に希望を与え、スポーツの推進を通じて国際社会の友好と親善を図り、平和な国際社会の樹立をめざした功績による。



名誉博士第8号 平成25年4月8日授与

ブルーノ・グランディ氏 [国際体操連盟 会長]

グランディ氏は、国際体操連盟 (FIG) 会長として、長きにわたり体操の普及に尽力し、オリンピック・ムーブメントを推進し平和な国際社会の実現を図った功績による。

名誉博士第9号 平成26年3月7日授与

岡本 昭氏 [横綱審議委員会 委員]

岡本氏は、相撲をはじめとする日本の伝統武道の奨励・促進や日朝スポーツ交流を通じたオリンピック・ムーブメントの推進により平和な国際社会の実現を図った功績による。



名誉博士第10号 平成26年3月7日授与

金 正幸氏 [韓国オリンピック委員会 会長]

柔道をはじめとするスポーツを通じて韓日スポーツ交流の発展に尽力するとともにオリンピック・ムーブメントを推進して平和な国際社会の実現を図った功績による。

名誉博士第11号 平成28年10月21日授与

トーマス・バッハ氏

[第9代国際オリンピック委員会 (IOC) 会長]

国際オリンピック委員会の委員長としてオリンピック・ムーブメントの推進に尽力し、スポーツを通じた国際社会の平和の実現に向けた顕著な功績による。



名誉博士第12号 平成29年3月10日授与

池田 敬子氏 [日本体育大学 名誉教授]

体操選手として国内外の競技大会で顕著な成績をおさめ、女性アスリートの先駆けとして活躍するとともに、長年にわたりジュニア世代の育成に携わり我が国の体操の発展に顕著な功績による。

名誉博士第13号 平成29年3月10日授与

松浪 健四郎氏 [学校法人日本体育大学 理事長]

日本を代表するトップアスリートとして優れた成績をおさめ指導者として多数のオリンピック選手を育成するとともに体育スポーツに関する教育と研究を通して我が国のスポーツ振興に尽力し、スポーツを基軸にした国際交流に顕著な功績による。

名誉博士第14号 平成30年4月3日授与

二階 俊博氏 [元国務大臣 衆議院議員]

観光庁及びスポーツ庁創設に主導的な役割を果たし、また、本学と全国50を超える自治体とのスポーツ交流への支援を通して、地域活性化を図るとともに、二十数ヶ国の発展途上国の友好議員連盟の会長の重責を担うなど平和社会の実現に向けて顕著な功績があったことによる。

博士課程を開設 2020年 4月

2014年、これまでの本学のスポーツ・健康の知見を活かし、保健・医療・福祉分野に貢献するため開設された「保健医療学部」。2018年には、臨床現場における指導的立場の人材養成を目的として、「保健医療学研究科(保健医療学専攻)」に修士課程として「高度実践柔道整復師コース」「救急災害医療学コース」を開設した。そして、さらなる高度人材養成や社会貢献を目指して、2020年4月に博士課程として「運動器柔道整復学専攻」「救急災害医療学専攻」を新設する。「こどもに夢を」、「高齢者に健康を」。臨床と研究の両輪により、人々の心身の健康の維持と増進、QOL (Quality of Life=生活の質)の向上に資することを目指す。

保健医療学研究科 博士課程

救急災害医療学専攻

① 開設の社会的背景

救急要請件数の増加、高齢者搬送など時代の変化を正確にとらえ、今後起こりうる問題への対策を含めた救急医療体制を構築できる研究者が求められている。さらには、救命救急処置についても、安全・検証など多様な視点から、学術根拠に基づき、また医学的に根拠を確立する病院前救護での研究が遂行できる研究者の養成が切望されている。今全国各地で毎年発生する自然災害やテロリズムなど懸念が高まる中、さらなる救急医療体制の推進も急務である。このような救急災害医療への需要の高まりに対し、専門的な研究者として研究推進力を備えた救急救命士の人材を育成することが目標である。

② 教育目標

救急災害医療の指導者としての資質を基礎として、救急災害医療の臨床現場や教育研究者の養成を目的とし、臨床または教育現場で、科学的根拠に基づき研究が遂行できる人材育成を目標とする。これを目指し、「最新の医学や社会情勢を常に学ぶ姿勢を有し、自ら研究活動が行える能力」「国際的な視野と高い倫理観を有し、社会の発展に貢献できる能力」「救急災害医療に携わる医療人としてのプロフェッショナル・オートノミーを有し、研究成果を国内外に向けて発信する能力」を育成する。

③ 教育課程

研究の専門領域である「救急災害医療学分野」では、救急災害医療に対するメカニズムから、救命救急処置などの臨床現場、また発達障害や医療訴訟など社会的事象を対象とする。疾病や外傷だけでなく救急救命処置を含む医療的な介入、個々の特性や社会的要因など多角的な研究を遂行する。さらに「スポーツ救急学分野」「国際救急・災害システム学分野」に展開し、研究成果を社会に還元する。

④ その他の特色 (修学支援)

ティーチング・アシスタント制度により、保健医療学部救急医療学科の「シミュレーション基礎・シミュレーション実習Ⅰ～Ⅵ」、「野外活動実習」、「救助救命医療学演習」、「救急車同乗実習Ⅰ・Ⅱ」、「病院実習Ⅰ・Ⅱ」の科目において教育補助業務を行うことにより、臨床・教育現場で指導者としての能力を向上させ、奨学に資する手当を支給して修学を支援する。

⑤ 期待する入学者

救急災害医療分野における極めて高度な専門性を備えた人材を育成するため、次の資質を入学者に求める。「最新の医学や社会情勢を常に学ぶ姿勢を有し、自ら研究課題に取り組む意欲がある者」「救急災害医療学における専門知識・技能・問題解決能力を有する者」「臨床現場における技術指導者や研究手法の指導者になりたいと強く志望すること」「国際的な視点を持ち、最低限のプレゼンテーション能力と豊かなコミュニケーション能力を有する者」。

⑥ 名称・学位等

名称：保健医療学研究科 Graduate School of Medical and Health Science
救急災害医療学専攻 Doctoral Program in Emergency and Disaster Medicine
学位：博士(救急災害医療学) Doctor of Philosophy in Emergency and Disaster Medicine



EDMSの救急車

学内に常備された日体大緊急・災害時救護医療支援派遣チーム(EDMS; Emergency Disaster Medical Service)の活動に欠かせないオリジナル救急車を種々のイベントや救急・災害現場などに派遣し、それらの現場で超急性期の医療支援活動や教育指導を行う。また実践的な臨床研究と講義に役立てる。さらに救急・災害現場活動から得られた数々の情報を検討し専門的なリサーチへと深化させる。

学部の教育体系イメージ

研究活動を行い、専攻分野に関連する高度の専門的な業務に従事するに必要な教育・研究能力かな学識を養うことを目的とする

救急災害医療学専攻

卓越した能力に加えて、専攻分野における教育・研究能力を培うことを目的とする科学的根拠に場の人材育成、能力を養成する

救急災害医療学コース

な専門知識と臨床技量をもつ、あるいは救急医療従事者に必要なスキルと意識を総合的にもつプロフェッショナルを育成

救急医療学科

高度な研究・臨床を推進し、柔道整復・救急災害医療分野の指導的役割を担う人材を育成

大学院・保健医療学研究科に

保健医療学研究科 博士課程

運動器柔道整復学専攻

① 開設の社会的背景

超高齢社会を迎える中、わが国では平均寿命と健康寿命の差が他の長寿国と比べて大きいことが問題とされる。運動習慣を定着・維持する上で、運動器の外傷・障害への対応や予防は不可欠だ。こうしたニーズの一方で、柔道整復領域において修士課程や博士課程の設置などの高等教育化は遅々として進んでいない。また、柔道整復師への卒後教育や生涯教育の機会とは十分とは言えない現状がある。高度化する医療を自律的に研鑽できる指導者・教育者、さらに臨床と研究を両輪として、理論と実践を兼ね備えた人材が不足していることが開設の背景にある。

② 教育目標

柔道整復領域における臨床研究を実施できる能力と、指導者・教育者、教員を指導し養成できる教育者となる資質の養成を目的とする。「運動器外傷・障害の施術と予防に関する臨床研究を実施できる人材」「運動器の抗老化（アンチエイジング）を安全かつ効果的に実施する運動プログラムを立案、指導し、健康寿命の延長に貢献できる人材」「柔道整復の施術所（接骨院・整骨院）の社会的役割を創造し、研究成果を地域に還元できる人材」「開発途上国の医療・スポーツ分野において柔道整復の特徴を活かして活躍できる人材」を養成する。



スポーツキューアセンター横浜・健志台接骨院

診療とともに保健医療学部整復医療学科附属臨床実習施設として展開。運動器柔道整復学専攻では、同施設を臨床研究の拠点として位置付け、臨床能力の向上とともに、現場で得た気づきを臨床的疑問から研究課題に構築し、臨床研究を推進して、根拠に基づいた柔道整復術（Evidence-based Judo Therapy, EBJT）の実践を目指す。

③ 教育課程

臨床研究を遂行するための医科学的知識と技術を修得するための専門科目と研究課題を解決し、論文を作成・発表する能力を養成する特別指導科目を基本とし、柔道整復領域の教育者を養成する専科教員養成科目を配置する。本専攻の教育課程は厚生労働省の「専科教員養成講習会」の指定を受けており、必要科目の修得により柔道整復師養成施設の教員資格が得られる※。研究マインドと教育力を併せ持つ「教員を指導し養成できる教育者」の養成も視野に入れている。

※その他に条件があります。

④ その他の特色（修学支援）

ティーチング・アシスタント制度により、保健医療学部整復医療学科の「整復医療学科専門教育科目」のうち「柔道整復実技」「臨床実習」「総合」の科目において教育補助業務を行うことにより、教育・臨床の現場でのトレーニングの機会提供により指導者としての能力養成を図るとともに、奨学に資する手当を支給して修学を支援する。さらに、スポーツキューアセンター横浜・健志台接骨院において柔道整復師の業務に従事するアルバイト制度も実施する。

⑤ 期待する入学者

博士課程では、柔道整復領域における臨床研究を実施できる能力と、将来その指導者となる資質の養成を目的とするため、柔道整復師の資格を持ち、他大学院において柔道整復領域の修士課程を修了した者や柔道整復領域以外の修士課程を修了した者なども受け入れ、年齢、スポーツ、栄養や心理等と運動器との関連を多面的に捉えて臨床研究を推進する。

⑥ 名称・学位等

名称：保健医療学研究科 Graduate School of Medical and Health Science
運動器柔道整復学専攻 Doctoral Program in Judo therapy
学位：博士（柔道整復学） Doctor of Philosophy in Judo therapy

保健医療学研究科・保健医療



大学スポーツは、社会から大きな期待を寄せられながらも、運動部等の活動の支援はまだまだ十分とは言えません。今後、さらなる高度化・専門化を目指す上で、体系的・戦略的な運営もますます必要になってくるでしょう。こうした課題や社会的期待を見ずして、2019年3月に発足したのがUNIVAS（一般社団法人 大学スポーツ協会／呼称：ユニバス）です。日体大がここで主導的な役割を果たしていくことは言うまでもありません。その概要と、日体大としての取り組みの一例（日体大スポーツ指導者研修会）を紹介します。



～大学スポーツが変わる。次代を担う学生アスリートを支援する。～ UNIVASと日体大の取り組み

（一般社団法人 大学スポーツ協会）

【概要】

全米大学体育協会（NCAA）をモデルに、大学スポーツを横断的に総括する組織の構築を目指して、スポーツ庁や設立準備委員会等で検討が進められてきました。この結果、UNIVAS（一般社団法人 大学スポーツ協会）が発足。国公私立大学と競技団体が主な構成員で、現在は参加資格のある774大学のうち日体大をはじめとする223大学、および34の競技団体が加盟しています。日体大関係者は、川淵三郎氏（名誉博士称号授与）と松浪健四郎学校法人日本体育大学理事長が顧問として、有森裕子氏（客員教授）が副会長として参画しています。

【設立理念】

大学スポーツの振興により、「卓越性を有する人材」を育成し、大学ブランドの強化及び競技力の向上を図る。もって、我が国の地域・経済・社会の更なる発展に貢献する。

※卓越性を有する人材：知・徳・体（生きる力）を備えた、身体面・精神面と学業面で優れた人材

【事業内容】

学びの環境を充実させる

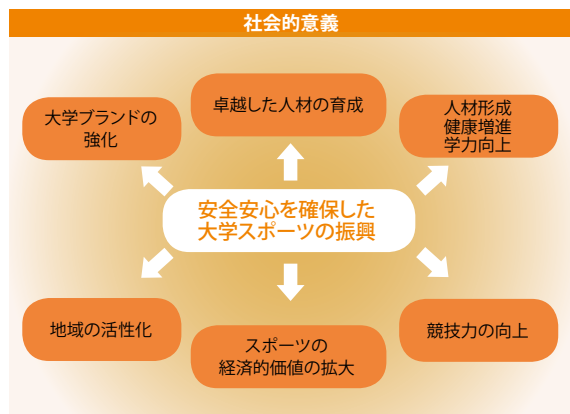
学生が競技力向上に邁進しながら、学生の本分たる学業にもしっかりと注力できるような環境を整えていきます。入学前からの教育推奨プログラムを導入したり、各競技の大会日程が一覧できるカレンダーの策定や、学業基準の導入の可能性を検討するための実証事業などを行います。

安心して競技に取り組めるようサポートする

学生が安心して競技に取り組めるような条件や仕組みを整備していきます。安全安心に関するガイドラインを策定し普及啓発するだけでなく、実際に大会の現場にメディカルスタッフを派遣したり、ハラスメントなどの相談窓口を設置するなど、様々なサポートを行います。

大学スポーツを盛り上げる

学生がより高いモチベーションを持って競技に打ち込めるように、多くの方が大学スポーツに注目し、応援できるようなムーブメントを起こしていきます。学生が真剣に試合や競技に打ち込む姿をライブ配信したり、競技成績でポイントを競う競技横断型大会の開催、文武両道アスリートやスポーツマンシップ溢れるアスリートの年間表彰制度を新設して、大学スポーツ全体を盛り上げていきます。



参考：UNIVASホームページ スポーツ庁ホームページ

UNIVAS 指定研修会

日体大スポーツ指導者研修会を実施

2019年12月18日 主催：日本体育大学アスレティックデパートメント

UNIVAS は大学スポーツの振興と人材育成が主な目的であり、すなわち大学における運動部活動は教育活動の一環として位置付けることができます。そこでは当然のことながら、指導者が重要な役割を担います。競技力向上はもとより、アスリート・学生としてふさわしい行動の指導、そして指導者・コーチ自身のコーチング哲学やデュアルキャリアの醸成も求められています。運動部学生が学業を充実させ、安全・安心な環境でスポーツを行える環境を整備する UNIVAS の趣旨に則り、日体大の学友会運動部の指導者（部長、顧問、監督、コーチ、その他）を対象に研修会を実施しました。

当日、まず具志堅幸司学長から、日体大のコーチングが社会的に高い評価を得ていること、日体大が UNIVAS をリードする存在になることが期待されていることが述べられました。日体大の指導やコーチングがいつそう進化し、それによって競技成績もさらに向上するという、本研修の位置づけの重要性をあらためて認識しました。

研修の目的として、①大学スポーツをめぐる国内の現状と動向について指導者に伝達し理解を深めてもらう、②日本体育大学のスポーツ指導者としての自覚を促すとともに、指導者の学びと研鑽を支援する、③ UNIVAS が目指す「卓越性を有する人材」の育成を主導的に担う大学スポーツ指導者の養成を図る、以上の3つが掲げられています。研修は東京・世田谷キャンパスと横浜・健志台キャンパスをテレビ会議システムで結び、受講者参加形式で、コーチングエクセレンスセンター長・伊藤雅充教授の講話・進行により行われました。

プログラムは、学生が受講しているコーチング関連授業の内容が紹介された後、コーチング哲学を中心に展開。両キャンパスの受講者がアンケート回答システムを利用して「コーチングの目的」「コーチングの行動指針」「大切にしたい価値」「コーチングの課題」などについて自身の考えを表明し、共有していききました。

日体大は国際コーチングエクセレンス評議会に日本で初めて参加したり、大学院・

体育科学研究科にコーチング学専攻を有するなど、その先端のコーチング研究・指導に定評があります。日体大のコーチングの授業では、コーチに必要な能力である、「専門的知識（種目・競技等について）」「対他者の知識（他者との関わり・コミュニケーション）」「対自己の知識（自己認識と省察）」のうち、後者の「対他者の知識」「対自己の知識」に焦点を当てて、学生を指導していることが説明されました。スマートフォンを利用して全員が体験した「伝えるワーク」では、その難しさを再認識した参加者も多かったようです。

さらに後半では、コーチとしての成長について考えました。学生は本質的に自分とは異なる人格であり、管理・コントロールし切れるものではありません。一方、コーチ自身が変えることは可能ですから、自分が変わることで学生にどう良い影響を与えられるかを考え、実践していくことが有効です。望ましいワークライフバランスを維持しつつ、どのように学んでいけば良いかなどについて示唆を得ることができました。

コーチングエクセレンスセンターでは、さまざまな学びの場を提供し、意見を共有しながら知恵を出し合うワークショップを実施しています。その一端を体験し、気づきの多い研修となりました。日体大の競技力のさらなる向上や部活動の活性化、ひいては大学スポーツの発展に貢献するため、一人ひとりが研鑽に努めていきたいものです。

コーチングの学びと実践のアウトライン



コーチング哲学（価値観、学び方、人との関わり方、自身の生き方など）の重要性が解説されました。

ワークショップを体験



アンケート回答システムを利用して参加者が意見を表明。大切にしたい価値観の1位は「信頼」。

コーチングエクセレンスセンターの取り組み

・ワークショップの例（2018年度）

コーチの学びを支援するため、学内外のワークショップやメンタリング（個別相談対応）を行っています。

- ＜学内向け＞
 - 安全なスポーツ環境と事故の対応
 - コーチという生き方
 - 時代に適合したコーチング
 - ～NCAA日本人コーチと考える大学スポーツコーチング～
 - 未来志向のコーチング
 - NITTAIDAI×J SPORTSワークショップシリーズ
 - ～想定外のことが起きた時、取材対応は大丈夫ですか？～

- ・昔は白でも今は黒？ ～あなたの常識を一度疑ってみませんか～
- ・選手の個性と向き合う
- ・選手とコーチをつなげるコミュニケーションスキル
- ・年間の振り返りと計画
- ・選手の発言を引き出すミーティングの組み方
- ・男性コーチ限定 女性アスリート指導のポイント

- ＜学外向け＞
 - ・コーチとしての成長を計画する
 - ・「プレイヤーの学びを支援する」
 - プレイヤーのニーズを見える化する
 - ゲームを中心とした練習づくり
 - ・コーチに求められるコミュニケーションスキル
 - ・「女性コーチのためのコーチングワークショップ」
 - コーチとしてのコミュニケーションスキル in 世田谷
 - コーチをコーチする

スポーツ・健康をリードする研究活動

(日本体育大学における研究活動の基本方針【活動方針】)

VOL.2 オリンピックスポーツ文化研究所 スポーツの理想を次代に繋ぐ



猪谷文庫

新たな「日本体育大学における研究活動の基本方針・基本計画」に基づき展開されている研究活動において、スポーツの総合的・文化的研究を牽引するのがオリンピックスポーツ文化研究所である。人なくしてスポーツは成立しない。近代オリンピックはスポーツ最大の祭典である一方で今日的な課題を内包している。これらを人文・社会・自然科学の各領域から多面的・複合的に考察し、オリンピックの理念やスポーツの理想を深化し、建学の精神の実現に寄与することが本研究所の目的である。

現代のオリンピックは、フランスの教育者ピエール・ド・クーベルタン男爵によって1896年第1回大会がアテネで開催された。近代オリンピックを再興したクーベルタンの理念は人類の幸福を願い、未来を担う人間を理想へと導く道を開いた。

オリンピックは人類の知的遺産である。それは人々に夢を与え、競技者を成長させ、人間相互の理解と敬意を生み出すために存在する。しかしながら相互の憎し

みが広がり、名誉や倫理よりも実利に価値を求める時代にあって、オリンピックも受難の時代を迎えている。

このように、スポーツの成熟、持続可能な発展には、哲学的・文化的・社会的角度からの多面的な理解が欠かすことができない。本学はこれまでメダル獲得においても選手と役員の活躍の面においても、近代オリンピックの歴史とともに歩んできた。これはまさに日本のスポーツ文化の歴史ともいえる。そして本学には、オリンピックに託された人類の夢を守り、崇高な理念を継承していく学園の府であることが求められる。本学の学術的なならびに社会的責務を果たすため、オリンピックの研究を推進し、その成果を次世代に贈ることを目的に設立されたのがオリンピックスポーツ文化研究所である。

オリンピックの研究を通じて建学の精神を実現し、広く世界の福祉に貢献する。さらには本邦のスポーツ文化の牽引を行う。そのために、具体的には次のような任務を遂行する。

- ・オリンピックの歴史、理念の研究(文献収集、国際的な研究情報の収集)
- ・オリンピック理念の教育(トップアスリート、学生、指導者)
- ・日体大におけるオリンピックの歴史の構築(卒業生、関係者の品物、練習日記などの文書の収集と展示)「オリンピック博物館」あるいは「日体大オリンピック記念館」等に発展することを検討する。
- ・ドーピングの倫理、社会学的研究
- ・ドーピング防止教育(アスリート、指導者)
- ・日本スポーツ文化の研究

次ページの研究プロジェクトを見てもわかるように扱うテーマは多岐にわたる。中でも本学ならではの特徴的な研究の一例を挙げれば、日体大とオリンピックの関わりを浮き彫りにする「メダリストへのインタビュー」だろう。学術誌『オリンピックスポーツ文化研究』に「メダリストの軌跡」と題してインタビュー内容が掲載されている。これまで19名のメダリストを取り上げ、競技面はもとより、スポーツ観・人間観といった哲学的側面まで掘り下げて偉業の記録・継承を試みている。

また、研究活動とともに、スポーツ文化・オリンピック・パラリンメントの啓発のため、セミナーも展開している。「スポーツの祭典の継承——オリンピック・パラリンピックを考える」と題して、2018年度は「オリンピックを考える」——と題して、2019年度は「オリンピック・パラリンピックを識る」、2020年度は「オリンピック・パラリンピックを考える」をサブテーマに掲げて開催した。本セミナーは2020年度まで実施する予定である。

さて、「オリンピック憲章」の根本原則には次のことが書かれている。

1. オリンピズムは人生哲学であり、肉体と意志と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指すものである。スポーツを文化や教育と融合させるオリンピックが求めるものは、努力のうちに見出される喜び、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基いた生き方の創造である。
2. オリンピズムの目標は、スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は、人間の尊厳保持に重きを置き、平和な社会を推進することにある。

(2011年版オリンピック憲章、日本オリンピック委員会)

このようなオリンピックの理想を現実化するための活動が「オリンピックムーブメント」と呼ばれる。これらの本質が本学のミッションと共通することは論を待たない。

「スポーツは、世界共通の人類の文化である」「(スポーツ基本法前文)の理念の実現のため、主導的役割が期待されている。

建学の精神を具現化し、スポー

オリンピックスポーツ文化研究所 2019 年度プロジェクト

研究所員一覧

役職	名前	所属	職名	専門
所長	関根 正美	体育学部	教授	体育スポーツ科学系
所員	後 藤 彰	スポーツ文化学部	教授	身体教育系
	津田 博子	スポーツ文化学部	教授	身体教育系
	石井 隆憲	スポーツマネジメント学部	教授	体育スポーツ科学系
	日比野 幹生	スポーツマネジメント学部	教授	体育スポーツ科学系
	依田 充代	スポーツマネジメント学部	教授	体育スポーツ科学系
	笠井 里津子	児童スポーツ教育学部	教授	身体教育系
	近藤 智靖	児童スポーツ教育学部	教授	身体教育系
	須永 美歌子	児童スポーツ教育学部	教授	体育スポーツ科学系
	成田 和穂	保健医療学部	教授	健康医療系
	齋藤 雅英	スポーツ文化学部	准教授	教育福祉系
	波多腰 克晃	スポーツ文化学部	准教授	体育スポーツ科学系
	松浪 登久馬	スポーツ文化学部	准教授	体育スポーツ科学系
	佐野 昌行	スポーツマネジメント学部	准教授	体育スポーツ科学系
	松 瀬 学	スポーツマネジメント学部	准教授	体育スポーツ科学系
	亀山 有希	児童スポーツ教育学部	准教授	体育スポーツ科学系
	村田 由香里	保健医療学部	准教授	コーチング系
	松本 真咲	体育学部	助教	身体教育系
	仲間 若菜	スポーツ文化学部	助教	身体教育系
	福 井 元	スポーツ文化学部	助教	体育スポーツ科学系
	神田 俊平	大学院	助教	スポーツ文化・社会科学系
	富田 幸祐	オリンピックスポーツ文化研究所	助教	

プロジェクト 1

日体大とオリンピックの関わり

◆企画：メダリストへのインタビュー／資料の発掘／アーカイブ／オリンピック教育プログラム・日体大スタンダード

研究代表者：依田充代

◆研究者：石井隆憲、後藤彰、近藤智靖、齋藤雅英、波多腰克晃、松浪登久馬、福井元、神田俊平

プロジェクト 2

オリンピックの危機と持続可能性

◆企画：アンチ・ドーピング／競技施設・財政論／メディア・大衆論／国際政治と戦争／オリンピックと女性アスリート／エリートスポーツ

◆研究代表者：成田和穂

◆研究者：関根正美、依田充代、須永美歌子、亀山有希、日比野幹生、佐野昌行、波多腰克晃、松瀬学

プロジェクト 3

オリンピックと芸術文化

◆企画：身体運動と美／セレモニーの芸術学

◆研究代表者：笠井里津子

◆研究者：関根正美、石井隆憲、津田博子、村田由香里、仲間若菜、松本真咲、富田幸祐

プロジェクト 4

猪谷文庫の整理と解題

◆研究代表者：関根正美

◆研究者：神田俊平、富田幸祐

プロジェクト 5

日本におけるオリンピック・パラリンピック招致

◆企画：名古屋招致活動(1988)／大阪招致活動(2008)／長野招致活動(1998)

◆研究代表者：富田幸祐

◆研究者：関根正美、齋藤雅英、松瀬学、神田俊平

学術誌『オリンピックスポーツ文化研究』

表紙に鳩が飛んでいるが、一羽だけ違う鳥が混じっている。平和の象徴とともに、当研究所の立場を意味し、理念よりも実利が優先されがちな現実の中で、現場への意識を携えつつ、アカデミズムとしてのオリンピックの知的探求を目指す決意を示している。



猪谷文庫

オリンピック・メダリストであり、国際オリンピック委員会の理事・副会長、日本オリンピック委員会の理事、日本オリンピック協会副会長を歴任した猪谷千春氏から寄贈された書籍・資料。一般に公開されることのないオリンピック招致に関する貴重な記録も。



多角的・総合的な研究により オリンピックの理想を追求する。

日体大が競技面でオリンピック・パラリンピックをリードしてきたことは言うまでもない。しかし、オリンピックの理念を継承しつつ、時代に合わせて持続可能なものとするためには、学際的に知見を集めた研究が不可欠である。その牽引役を担うのがオリックススポーツ文化研究所だ。



オリックススポーツ文化研究所長
体育学部体育学科

関根 正美 教授



セミナー「スポーツの祭典の継承—オリンピック・パラリンピックを識る—」

「オリンピックスポーツ文化研究所の研究理念はなんでしよう？」

今日のオリンピックに対して様々な批判があることも事実です。特にドーピングの蔓延とスポンサー中心主義とも言われる商業主義などです。本来の理念とかけ離れてしまったオリンピックをどうすればいいのか。この問いに対して、ジャーナリズムなどでも指摘がなされていますがオリンピックへの批判と新たな構想をするには学術的な研究が必要です。オリンピックとそれに関連するスポーツ文化を総合的に研究することを目的としています。日体大はオリンピックに競技面で多大な貢献をしてきています。今や研究面でもオリンピックに貢献する時であるとの考えです。

「研究所の特徴や日体大における優位性はなんでしよう？」

まず、「オリンピック研究所」を冠した機関自体が日本の大学にはありません。世界的にみると、アメリカ、フランスの大学にいくつかオリンピック研究所があるようです。オリンピックといえば日体大。オリンピックの研究機関としてオリンピックにフォーカスしたジャーナルといえば、今のところ日本では日体大なのです。また、猪谷文庫をはじめとする所蔵資料の価値は未だ計り知れないものがあります。

さらに、医学、生理学が専門の先生にも参加していただいています。今日の高度化された研究状況の中で、たとえ「人文系」といっても科学の成果を無視しては現実に対応できません。特にオリンピックにおけるドーピング問題やジェンダー・歴史研究においても科学の知見と方法は必要です。それによって、現実に対応したオリンピックにまつわるスポーツ文化研究が可能になってくると考えます。

「現在取り組んでいる研究テーマや、特に力を入れている研究分野・活動プロジェクトなどを紹介ください。」

研究プロジェクトの「日体大とオリンピック」ではリーダーの依田充代教授を中心に日体大メダリストの軌跡についてインタビューや執筆依頼をしながら、メダリストの証言を残していく活動を展開しています。機関誌『オリンピックスポーツ文化研究』に毎号掲載しています。いずれは単行本化する計画で進めていましたが、ようやく来年度にこれまで

Research Institute for Olympic Sport Culture

猪谷千春氏(国際オリンピック委員会元副会長)から
提供された猪谷文庫



— 研究所の取り組みにおいて課題と感じていることはなんでしょう。

まず、猪谷文庫をはじめとする貴重な資料を整理し、それらを研究の高度化と教育にどう生かしていくかです。

一方、懸念材料としては、東京大会にはロシア代表としての参加ができなくなりました。東京大会の課題も浮き彫りになってきています。オリンピック・パラリンピックの理念を世界規模で実現していくための祭典はどうあるべきなのかを考えるために、体育・スポーツの専門家として敢えて大会を批判的に見ることも必要だと考えます。

— 研究所の立場から、2020東京オリンピック・パラリンピックの着眼点や、学生・関係者が理解しておくべき同大会の課題を解説ください。

アスリートの立場でなくても、ボランティアでも観戦でもいいので、何らかの当事者になって楽しみながら後世に語り継ぐ経験を得られれば幸せなのではないでしょうか。同時に東京で開催される稀有の機会です。そして日体大関係者を結果の如何に関わらず応援し、オリンピック・パラリンピックに出場した競技者に対して敬意をもつことが重要です。これは国民全体に伝えることです。

の記事を集めて単行本化の第一弾が実現しそうです。これによって日体大のオリンピックがどのような学生生活を送りメダルに臨んだかの記録と物語を残すことができます。

また、プロジェクト「芸術文化」は、これからのオリンピックにとって重要です。オリンピックは平和の祭典であると同時に芸術の祭典でもあります。この点は競技に比べてあまり注目されませんが、開会式、閉会式や記録映画などもオリンピックの理念や価値を映し出してきました。しかし、これらに関する研究はそれほど多くありません。このプロジェクトは貴重な研究になっていくものと考えています。

— 今後の構想・抱負をお教えてください。

日体大には精神面だけではなく有形財としてのオリンピック・パラリンピック、スポーツ文化に関する宝物がたくさんあります。本学にはこれらを展示・公開する場がありません。他大学では東京大会に合わせる形でスポーツ関係のミュージアムをオープンさせたところもあります。今後のキャンパス再開発の計画の中で、日体大オリンピックスポーツ文化ミュージアム構想を取り入れていただけないかという思いがあります。

また、当研究所が日本とアジアにおけるオリンピック研究

次に、国際的な展開については体育研究所と連携し、時には学びながら進めていくつもりです。オリンピックはその始まりからヨーロッパの文化や価値観のもとで発展してきました。世界的に見て、その価値観は永遠に不変ではないでしょうし、オリンピックも常に課題を抱えています。国際化という時に、これからの時代はアジアという視点からのオリンピック研究が必要と考えます。中国、台湾、韓国の研究機関や研究者との連携ができないものか考えています。たとえば協定を結んでいる大学との共同研究や互いの研究誌に論文を投稿するなどから始めてみてよいかもしれません。そこからオリンピックやスポーツ文化についての新たな知の展開が生まれるかもしれません。

— 学部生・院生・教職員に対してメッセージをお願いします。

の拠点にならないと考えられています。具体的には先ほどのように他国の研究機関と連携体制を築いていくことです。それは普段の研究活動が無理なく国際的な研究活動になり、国際貢献につながっていくことを意味します。そのためのシステムを整えていきたいです。



伊原義文氏(長野パラリンピック組織委員会元事務次長)から
提供された伊原コレクション

関根 正美

(せきね まさみ)

オリンピックスポーツ文化研究所長、体育学部体育学科。筑波大学大学院博士課程体育科学研究科体育科学専攻/博士(体育科学)(筑波大学)。専門は複合領域、人文学、スポーツ哲学。オリンピック、スポーツ、教育等について、哲学的・文化的・社会的考察を試みている。



総集編 ～もしもに備えて～

「スポーツ救急をひもとく」と題してこれまで5回シリーズで連載してきました。

今回は総集編として、救急医療学科はもとよりすべての日体生に対して、

日体大の一員として、私たちに何ができるか、何をすべきかについて、

救急医療学科の小川理郎先生、鈴木健介先生、中澤真弓先生にお聞きました。

スポーツ救急についての正しい知識を持つとともに、実践できることが必要です。

一人ひとりが安全や健康に対する自覚を持ち、もしもに備えて行動していきましょう。



review

シリーズ「スポーツ救急をひもとく」では、次の内容を紹介してきました。見逃した方は学報NITTAIDAIバックナンバーをごらんください。

- 第1回 (学報 NITTAIDAI 54号)
スポーツ救急とは
- 第2回 (学報 NITTAIDAI 55号)
マラソン大会における
救護対応システム
- 第3回 (学報 NITTAIDAI 56号)
スポーツ救急における頭部外傷
- 第4回 (学報 NITTAIDAI 57号)
熱中症を知る、防ぐ
- 第5回 (学報 NITTAIDAI 58号)
スポーツ救急における
119の利用



シリーズ・ナビゲーター 鈴木先生からのメッセージ

スポーツをしていると怪我や事故が起こることがあります。そんなもしもにしっかり備えを行っていると、安心してそのスポーツに専念できます。また、スポーツをしている当事者だけでなく、観戦している人、周囲で支えている人までを視野に入れ、もしもへの対策をとっていると、より多くの人にも安心が広がります。

日本体育大学の学生は将来全国でスポーツに関わる仕事をしていく人が多いと思います。またスポーツに関わらなくても、日体大を卒業した学生がいることで、そこには日本一安心安全な環境ができることを目指しています。

スポーツ救急とは

小川 スポーツは人に感動や感銘を与えてくれます。

しかし、けがや心肺停止などのアクシデントは、スポーツが持つ魅力とは正反対なものです。スポーツの現場で、けがや死亡のリスクを取り除くのがスポーツ救急です。アスリートにとっては我々のような医療者がいることで安心して最高のパフォーマンスを発揮できると考えています。つまり感動を与えてくれるスポーツとするには、医療がしっかりとサポートしなければなりません。

鈴木 スポーツ救急では、スポーツの現場における救護で初期対応が最も大切です。あらかじめ、もしもに備えしっかりとした準備が一番必要なのです。

中澤 救急では、病気を持っている人の症状が悪化するなど、心積りができる場合も多くあります。しかしスポーツの事故はさつきまで元気だった人が突然倒れることが多く、本人や周囲に与える動揺も大きいでしょう。その人たちのいち早く救い、またスポーツの現場に戻るのが、私の考えるスポーツ救急です。

スポーツ救急の必要性

鈴木 中澤先生がおっしゃるように、スポーツで活躍している人に不幸なことが起こると、周囲の環境に非常に大きな影響を与えてしまいます。だからこそ、スポーツ救急が主導的役割を果たし、万全に準備すべきなのです。

中澤 スポーツは特別な例を除いて周囲には仲間がいるはず。もしものとき、仲間にスポーツ救急の知識があり、助けてあげられるよう準備をしておくべきだと考えます。

鈴木 事が起きて迅速に対応することはもちろん重要ですが、その現場で助けた人への心のケアも大事です。偶然その場に居合わせて救命救護をした人が、その後、助けた人がどうなったか、責任やストレスが重くのしかかります。その人が助けたという行為を讃え、よかったと伝えることで、その人も救われます。

日体大の学生に期待すること

鈴木 日体大の学生は卒業後、全国の学校をはじめとして様々なところで活躍すると思います。日体大の学生がスポーツ救急を学び、学校やスポーツの現場で、もしもの場面に遭遇したとき、迅速に、そして的確に救急対応ができれば、安心してスポーツなどができる環境がいつそう整うと思います。日体大の卒業生がリーダーシップをとり、スポーツの安心安全を全国に広げていくと、スポーツに限らず、広く社会的意義も大変大きいと期待されます。

小川 医療のプロとして、私たちの技術や知識が役に立つのであれば、とても嬉しいことです。私たちは高いプロ意識を持ってあらゆることに臨んでいます。私たちの知識や知見をみなさんが、どんどん活用してほしいと思います。



プロフィール……中澤 真弓 (なかざわ まゆみ)

保健医療学部救急医療学科准教授(救急救命士・防災士)。帝京平成大学大学院、政策研究大学院大学修了。修士(健康科学・防災政策)。東京消防庁で救急隊長や消防学校教官を経験し、帝京平成大学助教を経て、2018年より現職。専門は、救急車の適正利用や救急事故の予防など、救急システムに関する研究。



プロフィール……鈴木 健介 (すずき けんすけ)

保健医療学部救急医療学科准教授。日本医科大学博士課程修了。救急救命士・博士(医学)。2015年に日本体育大学保健医療学部助教、2018年に准教授に就任し、現在に至る。現在も日本医科大学多摩永山病院救命救急センターで救急救命士として命をつなぐ現場に従事する。



プロフィール……小川 理郎 (おがわ さとお)

保健医療学部救急医療学科長教授。日本医科大学大学院医学研究科(救急 医学)修了。医学博士。日本救急医学評議員、日本臨床救急医学学会評議員。日本救急医学会指導医／専門医、神経外傷／外傷・救急外科医。日本医科大学関連施設で救急医療、災害医療に従事し、日本医科大学救急医学教室などを経て、現職。

地域と連携した 救急医療学科の取り組み

小川 今、日体大救急医療学科として、市民の健康とスポーツを考える上で、横浜市青葉区でのマラソン大会を非常にうまくサポートしています。青葉区民マラソン大会がスタートした第1回から継続しています。また、昨今、自然災害が多く発生していますが、市民の危機管理の防災対策の指導もしています。

鈴木 市民の危機管理という点では「防災訓練 in 日本体育大学」を実施しました。これは宿泊を伴い実施する回もありました。横浜・健志台キャンパスを中心に、地域の方たちと学生がキャンパスのある青葉台を一緒に歩いて、どこが浸水する可能性があるとか、危険な場所はどこかなどをチェックすることも行いました。さらにDIG [Disaster (災害)・Imagination (想像力)、Game (ゲーム)] も

行いました。

中澤 DIGで学生と青葉地域の人がチームを作り、年齢や経験、考え方の違う人が同じテーマに取り組むことで、この場所には、子どもたちがよく集まるとか、この川は氾濫し



にくいとか、地域の人でしか知らないようなことを教えてもらうなど新たな発見もありました。

鈴木 青葉区の医師会と連携して災害が起きたときにどこに病院が対応するか、開いているかなどの情報を共有することもしています。

中澤 DIGを行うことで地域のことをより深く知り、青葉区のことにより好きになったという学生もいます。地域の人にとっても日体大が身近になったという声も聞きます。防災訓練をして地域コミュニティの再構築をしているとも言えるのではないのでしょうか。

救命蘇生研究会で モチベーションを上げる

中澤 救急医療学科の取り組みとして2018年からは救命蘇生研究会を開催し、今年2回目を行いました。研究会では救急医療学科の学生や卒業生が研究発表を行ったり、著名な講師による講演を聴いたりすることができます。相乗効果として、在校生・卒業生と救急医療関係者との交流が生まれています。

小川 救命蘇生研究会を単なるイベントで終わらせず、さらなるレベルアップを追求することも目的としているので勉強になり、学生にとっては良き思い出にもなります。

中澤 この研究会に参加して、日体大に入りたいという高校生もいました。発表する学生は大きな刺激になりますし、我々教員も学ぶところが多くあります。今回は「チャレンジ」をテーマにしましたが、来年はさら



防災訓練

第5回 青葉区民マラソン 平成30年11月25日(日)

に上を目指して「スーパーチャレンジ」をテーマにします。

小川 「チャレンジ」という英語の言葉には、困難なことや試験となるようなことに取り組むという意味があります。世の中には困難や試験が多くあります。それを乗り越えていくことが重要で、そのような高い志を持つという意味合いも含んでいます。

鈴木 困難や試験を乗り越えるという点でいうと、在学中に深刻な悪性の病気に襲われた救急医療学科の学生がいました。その学生は救急医療学科のシアトル(救急医療・救急車同乗研修)で素晴らしい経験をして、厳しい悪性の病気を乗り越えてくれました。病気に闘っているとき、「私はシアトルでのよき経験があるから耐えられる」と私たちに強い気持ちを表してくれました。その結果、病気との闘いに勝ち、さらに一度は諦めかけていた夢を実現することができたのです。チャレンジをした経験は生きていく上で非常に重要だと実感しました。

小川 私たちはその学生に医療を通して全力でサポートをしました。



技術だけでなく、精神的なサポートをするのも医療から学んでいるのは、人間教育なのです。

日体大生へのメッセージ

小川 とにかく今の自分を大事にしてほしいです。結果は大事ではありませんが、プロセスこそ一番重要です。結果は些細なことで決まってしまうこともよくあります。ただ、プロセスや経験はその後の人生の大きな糧になります。とにかく悔いを残さないことです。

中澤 学生時代にいろいろなことにチャレンジしてほしいです。そのチャレンジの目標は高く持つことです。ただ一気に高みを目指すのではなく、目の前のこと、小さなことかもしれませんが、それを手を抜かずしっかりとっていくことです。そうすると夢は実現します。

鈴木 学ぶ立場であるので、素直になることが大切だと思います。指導者から言われたことを素直に聞き、そして実行できるかが、その後の成長に大きな差をつけます。教員としてそのことを強く実感します。素直に吸収し、実行することが大きな成長につながります。

小川 アスリートとして高みを目指している学生も多いでしょう。ただ自分の身体の限界を知っておくことも、選手生命という点では重要なポイントです。その上でチャレンジしてください。

中澤 日体大は一流アスリートを輩出しています。我々も救急救命の分野で金メダリストになれるよう日々取り組みんでいます。

鈴木 救急救命を学んだ日体大の学生が全国に行き、もしもに備えれば日本のスポーツが世界で一番安心安全になると確信しています。



救命蘇生研究会

Next is us

日体魂の聖火リレー

～日体魂を受け継ぐ者～

11

入江 聖奈

ボクシング・フェザー級

小学2年のとき出会ったボクシング。
ボクシングは自身の成長を確認する存在。
プレッシャーを与えるスタイルを貫きつつ
柔軟にしなやかに闘う

——ボクシングを始めたきっかけ

小学校2年のとき、「がんばれ元氣」というボクシングマンガを読み、興味を持ちました。ボクシングをしたいと父に話したら、すぐにボクシングジムへ連れて行ってくれました。しかし、母は女子だからと反対していました。マンガ以上に、本物のボクシングは楽しそうで、みんなはつらつとしていました。

ボクシングを始めた当初はジムに自分が行きたいときに行く程度でしたが、基礎練習だけでなくスパarringをするようになり、また小学5年になると楽しくて週に5日くらい通うようになりました。マンガの真似をするのが好きで、自然に技術が身についた感じです。主人公の堀口元氣が繰り出すアップバーストレートという技が自分の得意技でした。中学2年くらいから全日本のジュニアの合宿にも呼ばれ、そこで褒められたこともあり、それが自信になっていました。

——木下鈴花選手の存在について

木下鈴花選手とは米子で同じジムの幼なじみということもあり、何でも話し合える相手です。そして、私にとつとも大きい存在です。私は小学校6年のときから東京オリンピックに出ることを目標にしていました。中学までは負けたことがなく、中学で日本一になったこともその夢を後押ししていました。しかし、高校1年のときにインターハイで初めて敗戦を経験したのです。結果、私はベスト8止まりで私に勝った選手がその大会で優勝し、フライ級の代表選手になりました。それが鈴花です。そのときの負けで実力の差を感じましたし、もっと強くなりたい、鈴花に追いつきたいと、さらに練習するようになりました。今でも同じ日体大のボクシング部の仲間であり、よく一緒に食事に行っています。

——ボクシングの魅力

自分のボクシングはプレッシャーをかけて相手を後退させるスタイルです。でもファイタータイプではないので、ただ押して近くで攻撃をしかけるというよりジャブで押していくイメージです。

ボクシングは負けてもしっかり練習を積み重ねれば、できなかったことができるようになり、自分が成長していることを実感できるので楽しいです。

試合のときは事前に戦略を考えるのではなく、直感で臨んでいます。憧れや目指す選手は特にいませんが、いろいろなボクシングの試合を見て、脚を使う攻撃はこうすればいいとか、前に出るときはこうしよう



入江聖奈 (いりえ せな) / 体育学部1年 ボクシング部所属。鳥取県立米子西高校出身。リラックス法はYoutubeで動画を見ること。最近は「ぶろたん」「フワちゃん」などがお気に入り。同じ部の木下鈴花選手は幼なじみということもあり、試合がないときはよく一緒に食事をするとか。

Next is us 日体魂の聖火リレー

◆兎澤朋美選手からの質問に答えて

「私は極度のあがり症だと思っています。トップアスリートには緊張しないという人もいますが、試合前に緊張したときどう対処しているのでしょうか」

自分も緊張するタイプで、試合の前日は眠れないこともよくありました。そこで心理サポートの先生に相談したら、試合など大きな舞台で緊張できるのは入江さんの特権だからマイナスに捉えないで、その緊張を受け止めて頑張ればいいとアドバイスをいただきました。以来、視点を変え試合前もポジティブに臨めるようになりました。

◆次号に登場するアスリートに向けて、入江選手からエールをいただきました。

同級生をはじめ、日体大のアスリートの皆さんはオーラがあり、存在感もすごいと思います。私も追いつけるよう努力しますのでもっと頑張りたいです。

次号アスリートへ、リレー質問を展開していきます。ご期待ください。

リングの上で主人公になり、 世界を目指して攻め続ける



など、その時々によって参考にする選手は違います。

——日体大に入学したきっかけは

日体大はオリンピック選手を数多く輩出していますし、サポートもしっかりしていると高校のときに聞きました。まずそれが日体大に進学した理由ですが、練習場がとてきれいで、ここなら4年間頑張れると思いました。

さらに女子選手が多いことも決め手になりました。これだけ恵まれた環境は日体大しかありません。入学してその思いはさらに強くなりました。日体大を選んでよかったと思います。

先輩は強くて優しい方々ばかりで、皆さん意識が高くとても刺激になります。特にキャプテンは自らきつい練習にも進んで取り組み、みんなを引っ張っていつてくれますし、アドバイスを聞くとしっかり応えてくれます。高校のときは女子の選手が少なく、自分から厳しい練習を試みることがなかなかできず、どうすればいいかを、鈴花に聞くか自分で解決するしかありませんでした。しかし、今は頼りにできる選手が周りに多いので安心できます。まるで家族のようで、遠慮はなく言いたいことは言える風通しのいい関係です。入学して4月に知り合ったばかりなのに、こんなに親しくなれるとは思いませんでした。

——東京大会と世界を目指して

今年、東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。本当に目の前に東京大会が迫ってきました。小学6年のときから東京オリンピックに出るという目標を持っていました。言葉にする目標は大きい方がいいと考えているので、目標は金メダルです。そのためには、まずは目の前の試合に集中して結果を出していくことが大事だと考えています。

実はこの前の世界選手権で負けた相手が世界一になりました。その試合は大差で負けたわけではないので、世界一というのは全く手の届かないものではないと思っています。しっかりと対策を取れば互角、いやそれ以上に戦えることが分かりました。2019年の春に負けた相手が長身だったので、その対処や外国人との試合に慣れないため対策もしっかり考えています。プレッシャーをかけていくのが自分の戦い方のスタイルですが、相手によって柔軟にその戦法を変えつつも、自分の強みは生かしていきたいと考えています。

夢の舞台がもう目の前なのでわくわくしますが、とにかく日々の練習を大事にしていきたいです。

横浜・健志台キャンパス学友会運動部所属学生に啓発講話を実施

令和元年9月27日(金)に、横浜・健志台キャンパス内で近隣合宿所を保有する学友会団体および健志台寮寮入寮団体の学生に対して、神奈川県青葉警察署による自転車運転の交通ルールに関する啓発講話を開催しました。

10月1日(火)から神奈川県条例で自転車損害賠償責任保険が義務化になることに伴い、交通違反や事故事例を取り上げて保険加入の重要性とルールの徹底に関して注意喚起がされました。

啓発講話を受けた学生からは、「自身の自転車運転方法についても見直すきっかけとなった」、「日体大の一員として、一つ一つの行動に責任を持ちたい」、「自転車事故による賠償額の高さに驚き、万が一のために保険に入ることの大切さを理解できた」といった感想が寄せられました。

本学では、自転車利用時における事件・事故を未然に防ぐためにも、今後も引き続き交通ルールの徹底・教育に取り組んで参ります。



アフガニスタン・イスラム共和国大統領が 本学に来校いたしました



令和元年10月23日にアフガニスタン・イスラム共和国モハメド・アシュラフ・ガニ大統領閣下が東京・世田谷キャンパスに来校されました。

モハメド・アシュラフ・ガニ大統領は、天皇陛下の「即位礼正殿の儀」に参列のため来日され、翌日、本学に来校されました。

記念講堂において、本学からは松浪 健四郎理事長、具志堅 幸司学長をはじめ、法人・大学職員、学生約300人が大統領の来校を拍手で歓迎し、理事長並びに学長挨拶の後、モハメド・アシュラフ・ガニ大統領にご講演いただき、本学との友好関係についてユーモラスを交えたお話を頂戴いたしました。

ご講演後は、アフガニスタン・イスラム共和国から本学へ留学しているムヒブザーダ・メヘラン君による花束の贈呈が行われました。

その後、モハメド・アシュラフ・ガニ大統領は、あんずの樹の記念植樹を行いました。



セーリング競技 49erFX級(女子) 山崎アンナ(ノエビア・日本体育大学)が 東京五輪2020日本代表選手内定！



令和元年12月3日～8日ニュージーランド・オークランドで開催されたセーリング世界選手権49erFX級(女子)で体育学部3年山崎アンナ選手(ノエビア・日本体育大学)が高野芹奈選手(ノエビア・関西大学)とペアを組み、見事20位となり日本セーリング連盟が定めた規定をクリアし東京五輪2020日本代表に選考されました。本学、現役学生では東京オリンピック内定第1号となりました。

※同連盟理事会の承認を経て、日本オリンピック委員会(JOC)に推薦され、JOCの承認により正式決定となります。
その結果を具志堅学長に報告いたしました。

